

第1節

一人一人が自信を持って経済活動を行うことができる社会づくりのために —仙台市の事例をもとに—

山内翔太郎

1. 序論

1600年に伊達政宗公が居城を青葉城としてその地に構えて以来、城下町として栄えたのが大規模都市としての始まりとされる、宮城県仙台市。現在ではそこに住む人口は100万人を超え、政令指定都市として東北地方の中心の機能を担っている。私は、自分自身が長い間過ごしたという経験と、仙台市に見られる大都市でありながら地方都市的な性質を持ち合わせているという特徴に興味を持ったので仙台市について調査をすることにした。

私が宇都宮大学に入るまでは仙台市を身近に過ごしていたのだが、その経験から気になったことがある。まず、仙台市が今なお抱える下請け体質である。仙台駅前には商業施設や高層オフィスビルが半径1キロ以上に渡って広がっている。それにより仙台へ通勤、通学、また娯楽を楽しんだり旅行で訪れたりする人は仙台市街地に集中し、仙台駅の一日あたりの利用者数は約8万人と、東北地方ではダントツ、全国でも52位にランクインしている(JR2012)¹。そのような仙台市駅前の市街地であるが、その一つ一つを注意して観察してみるとLOFT(東京)、PARCO(東京)、みずほ銀行(東京)、ダイエー(東京)、ヨドバシカメラ(東京)、FORUS(千葉)など、以上挙げた企業、商業施設、店舗はどれも括弧の中に書いてあるように本社を東京あるいは首都圏に構えるものである。また、ビルの中に入っているテナントにも首都圏に本社を構える企業や店舗が多い。これは2011年の震災以降に父から聞いた話なのだが、仙台市を中心に経済活動をしている人たちは首都圏と違い、自ら会社の起業や何らかの行動を起こして社会の変革を促す、また、志はあるがそれを実行する人は少ないようだ。確かに、仙台市に支店を持つ企業というのは一般的によく知られたものが多い。しかし、東京本社仙台支社の企業に勤めていた知人は震災時に首都圏と地方都市の隔たりというのを感じたという。このレポートでは、それらの私がこれまで見聞きしてきたことから深く掘り下げて、これから私たちが働くであろう場が現在どのような状況であるのか、今後私たちがともにはたらく世代の人たちの考えとはどういったものか、考察していく。

2. 本論 現地調査及びメールでの質問

調査はメールで対象の各企業にアポイントを取るところから始めた。対象とした企業は8社で、それぞれに質問内容と私自身行くことが可能なときにアポイントが取れるかどうか確認をした。うちアポイントが取れたのは2社で、残りはメールでの回答をいただいた。アポイントを取らずに自分の足で行ける範囲にある企業は足を延ばしたのだが、それらの企業はやはり担当者の方から直接話を聞くことはできず、成果があったところでパンフレットなどをいただく、などの対応にとどまったので、自分の目で見た仙台市、それぞれの企業というものを以下にまとめていきたい。

まず、対象企業に以下のように質問をメールにて送信した。

¹ JR 東日本…<http://www.jreast.co.jp/> (2014.6.27 閲覧)

(1)震災を経験し、そこから貴社若しくは担当者様が、東北あるいは宮城、仙台に対して抱いた感情、決意といったものはあるでしょうか。ございましたら、その背景や経緯なども含めて教えていただけると幸いです。

(2)仙台市というのは東京に本社をおく大企業の支店、支社が多く進出しています。これは私が人から聞いたことを総合して、自分なりに考えたことなのですが、そのような仙台市の経済状況の中で、貴社若しくは担当者様が感じているもの考えることはございますか。

(3)上記の二つとも大変漠然とした質問になってしまい、答えにくいと私自身感じております。こういった質問になってしまったというのも、私が今回質問させていただいたテーマ設定というのが、「一人一人が自信を持って経済活動を行うことができる社会作りのために」というもので、抽象的なテーマではありますが、東北の中心である地元仙台、宮城において、企業の方から見たこれまでの経済の歩みやこれからの展望をお聞かせいただきたいと思い、このような質問をするに至りました。このテーマにつきましても、もし担当者様が考えるものがあればお聞かせ頂けると幸いです。

これらの質問をして返ってきた返事というのは「弊社では回答する立場にはございませんので回答を控えさせていただきます」というものが多かった。そして、回答をもらったものについても、担当者自身の言葉というよりは既に発行済みの資料の中から、該当する部分を回答に代えて、という形式のものがほとんどだった。企業のCSRについてまとめた文書や企業HPのコンテンツに掲載している文章などがこれに当たる。

ここで、返事もらった中で質問に対してポイントが集約された適切な回答があるのでそれを以下に紹介する。これはITを専門に取り扱う、株式会社スプラウトジャパン²からのもので、その中では私が送った質問事項において改善のヒントも指摘されていた。私の文面は丁寧ではあるが、遠回しすぎであり何を伝えたいのかその意思目的がまったくぼやけてしまっている、欠如しているということだった。上記の質問を訂正しつつ回答をまとめていく。

【質問】

(1)震災を経験したことで芽生えた決意、気づいた感情や価値観などありますか？あれば、その背景なども合わせてご意見をお願いします。

【回答】

担当者の活動エリアであるIT関連企業の多くは、震災直後は壊滅的な被害や将来への懸念により、経済活動がストップし拠点を撤退する企業も少なくなかった。実際に、雇用を抱えたまま仕事がストップした企業にとっては経営的な大打撃となった。ただ幸いに復興景気やアベノミックスといった好経観からか、多くの企業は比較的短期間で業績が回復するに至った。それによって変化への危機感も薄れた感は否めない。

担当者は、震災とは関係なく東北の経済は概ね右肩下がりにあると感じていた。産業問わず下請け体質が蔓延し、新しい産業やサービスは生み出されず、勤勉で安い労働力が

²株式会社スプラウトジャパン…<http://www.sproutjp.co.jp/> (2014.7.6 閲覧)

「売り」の無策のまま、より安い賃金の新興国との価格勝負により企業も労働者も疲弊し自信をなくし、あり地獄の様な負のスパイラルにはまっていたようであったという。震災によって、その速度が一気に速まり、近未来が現実のものとして見えたことにより危機感を覚えたことは、大きなプラスになったという。多くの被災者がゼロからのスタートを決めた姿は、新しいことへの挑戦に対して背中を押してくれる大きな存在となった。

担当者は、この震災を機に起業に踏み切った。ただの下請けではなく、自らの強みを生かして独自のものやサービスを創りだし役目を「誰かがやるだろう」という無責任スタイルではなく「自分でやる」やらなければ未来は変わらない。次世代のために希望のある社会を残したい、という担当者の強い思いがあった。

東北は謙虚な人が多く自己主張も遠慮するため、商売が苦手な傾向になる。しかし、観察力の鋭さや勤勉さといった素晴らしい個性も持ち合わせていると担当者は述べた。個々の企業や人が小さな一步を踏み出し、お互いの強みを生かした上でタッグを組み、他の地域に負けない文化を創る材料は十二分にあり、そして、こういった考えを持った人たちが震災後ぐんぐん仙台や東北に増えていることが実感としてあるそうだ。

この質問の最後に、担当者が述べていたのは、伸び代はたくさんあり、震災後の東北は無数の可能性を秘めている、ということだった。

【質問】

(2) 仙台は支店経済と言われていますが、そのように実感されますか？メリット、デメリットなど感じることを具体的に教えて頂けますか？

【回答】

仙台には、担当者も述べていたように「支店経済」という側面がある。全国にいくつか同様の都市があるが、特に「支店経済色」が強いと担当者は述べた。仙台は地方都市（東北の中心）でありながら、かつ東京へも近い好立地にもある。「いざとなれば東京から仕事ももらえる」これが自立の妨げの一因と担当者は感じるという。他の地方都市と比べても、全国・世界に向けて独自の商品やサービスを発信している企業の割合が少ないのは、この環境のせいで「なんとかなる」と考えてしまうからなのではないかという可能性が存在している。有名な企業の支店や工場はあるものの、そこに対して新しいサービスなどを提案しても、最終決定の権限はそこにはないのがほとんどのケースであるという。今後も仙台は、支店経済という側面は変わりませんが、その立場をどのように活かすかについてはまだまだ工夫の余地があると、担当者はこの質問を結んだ。

(総括)

◇メリット

- ・大企業の支店を通じたチャンネル作り、ビジネスチャンスが期待できる。
- ・支店で築いた人脈により、将来的に日本全国やグローバルへ展開するチャンス。

◇デメリット

- ・支店経済という役回りに慣れてしまい、根幹から変えるような創造性に欠ける
- ・最終決定者が中央にいるため、スピード感が乏しい。改革の規模も小規模。
- ・研究や企画開発といった、創造性の高い仕事を望む学生の受け皿が少ない。

【質問】

(3) 東北の中心都市でもある仙台だからこそできること、やるべき役割など感じますか？

【回答】

仙台は東京に90分という好立地に位置しており、東京は日本における経済や情報の中心地であることから、そこからの情報収集と情報発信を行うために優れた立地にある。また、仙台は東北の中心都市であり、必ずしも中心的役割を担っていないシーンも見かけるが、立地的にも対外的にも揺るぎない東北の中心地である。東北には立地的に恵まれなくとも、産学官連携して特徴ある産業を育てている地域も多くあり、逆に仙台は大企業病に侵されてでもいるかのような場面を目にすると担当者は述べた。

震災で「変わらなければ！」という気風がある今こそ、仙台がリーダーシップを発揮して、東京や地方都市とのハブとなり、東北各地域のハブとなる活動が求められると続けて述べた。実際に小さなイノベーションが芽吹き始めているが、一方マネタイズ（収益化）で苦労している団体も多く、まだいくつかのハードルを越えることが課題となっている。このマネタイズについても、実働と資金のコラボレーションが必要となり、仙台がというわけではないが、これについても仙台は環境面でのリーダーシップを発揮すべきであると担当者は述べた。

3. 結論

この論文に着手し始めた当初、私は東北地方における大都市としての仙台市と東京など首都圏と比較したときに見えてくる地方都市としての仙台市を、経済を主題として、考える契機となった東日本大震災と関連付けてまとめていこうと考えていた。しかし、調査を進めていく中で、私の設定自体が漠然としたところがある、不備があることが判明していった。最終的なゴールや一つ一つの課題が見えにくいと指摘していただいたのは前述したとおりだが、株式会社スプラウトジャパンの協力もあり自分の目的の再確認をすることができた。私が考える「一人一人が自信を持って…」という目標は人が生活をする上で基本的なことではあるが、これ自体を解決する、理想を達成するというのは一朝一夕でできるものではない。私は、このテーマについて調べてきて、自分の設定の甘さに気づき、現状の把握の難しさや企業としての立場から学生に協力することの姿勢を知ることができた。

何度か現地に足を運び企業を訪問したのだが、タイミングが悪いことが重なり満足のいく結果は十分に得ることができなかった。しかし、企業を訪問すると同時に自分の足で仙台の街を改めて歩いて、その様子、人と人とのやりとりを自分の目で見ることが重視した。仙台という街は、仙台駅を出ると歩いて何分もたたないうちに多くの商業施設、オフィスビルを目にすることができる。中心部は常に開発を続け、地下鉄東西線が平成27年に開業するなど、これまでの南北への交通に加え東部の工業地帯へのアクセスがよくなる。大学や専門学校なども多く、学生が多く集まる街でもある。スプラウトジャパンの担当者が述べていたことの中にもあるように、学生と企業のつながりが生まれるような場が現在ではまだまだ少ないことが課題の一つである。このレポートの中で何度も比べてきた東京では、大小問わず様々な企業やNGOなどの団体が学生と協力してプロジェクトや活動を行っており、それは仙台のそれと比べると明らかに積極性に水をあけられている。創造力という点においては学生というのは社会に揉まれて現実性を身に着ける前の段階なので、非

第1章—第1節

常に適している。企業など大人からすると凝り固まった例えば下請的な気質なものや暗黙の了解的に定着してしまっているものをリフレッシュする機会であり、学生にとっては普段の生活ではわかりにくい、「仕事」というものを肌で感じる良い機会でもあり、両者がつながるといふことにはあらゆる可能性が潜在していると私は考える。

このレポートの作成期間中では十分な材料を得ることができなかったのが反省点である。しかし、それをきっかけに私のはじめに設定したテーマや問題点がよく改善、検討されることになったので、それも含めて今回のレポートにまとめた。